協 定 海 外 留 学 レ ポ ー ト

協定海外留学プログラム：１セメスター プログラム
留学先大学：インドネシア国立ジョグジャカルタ芸術大学（インドネシア）
芸術学部 アート・デザイン表現学科 ファッションテキスタイル表現領域 ３年次
Ｙ・Ｋさん

今回のインドネシアの留学では、大学の他に２つ地域に訪れてバティックを勉強した。最初に訪れた、インドラマユ県のパベアンウディック村は県内で最も貧困な村である。その村でバティック（ろうけつ染）をやっている女性たちの中に混ぜてもらい、バティックを行った。インドラマユでは漁業が有名であり、男性は遠洋漁業が主な仕事だが無職の女性が多く貧困の原因につながっている。なので、家のすぐ近くの場所で数人の主婦で蝋を溶かすポットを囲みバティックを行う。バティックというものが伝統的な一面を持つ一方、現在でも人々の生活を支えているということを実感した。

バティックを行う女性をインドネシアではプンバティックと呼ぶ。プンバティック達は小さい時からずっとバティックを行ってきたので蝋書きもとても早く、一日に約２メートル５０センチある長い布を全て書き終えてしまう。大学内でひとり、蝋描きを行うときと異なり集中して蝋描きに没頭することができる。

ここの工房では布に下書きはせず、直に一枚一枚蝋書きを行なっており勢いの良いタッチが売りとなっている。バティックのモチーフはインドネシアの伝統的な柄から、昔から村にある柄を長く使っている。また、漁業が盛んなインドラマユならではでエイやイカなどの魚の柄も見られた。プンバティックは蝋書き専門なので、蝋書きが済んでいる布の販売や受注を行なっている。なので、もし染まっているバティック製品が欲しい場合は外注を頼むか、自分で染めることとなる。インドネシア国内ではこのようなバティックの内職のような場所はたくさんある。しかし、２００９年にインドネシアのバティックがユネスコの世界無形文化遺産に登録されて以降、プリントのバティック商品が観光客の間に多く出回り始めた。そのため、プリントより高価な手書きのバティックは売れなくなり多くの工房が潰れた。なので、このように小さな村で今も手書きバティックを続けるのは難しい。

次に訪れたプカロガンという地域では、Tobal（トバル）というバティックの製造から販売までを行っている会社の蝋書き部門でバティックの制作を行った。Tobal は元々海外向けにアロハシャツなどをろうけつ染で製造し卸していた。現在はインドネシア国内向けに製造と販売を行っている。ここでは、チャンティンという蝋書き用の道具を使用した手書きバティックから、チャップというスタンプを使用する方法がある。その後染めを行い、洋服やかばんなどの縫製も同じ場所で行い工房内のお店で販売をしている。

プカロガンには中国系のインドネシア人が住んでいるエリアがあるので、バティックのモチーフも龍や中国のモチーフが多い。それらを用いられたチャイナ服風のデザインのワンピースも売られていた。プカロガンは特にバティックが有名な地域である。Tobal は同じ工房内にバティック製品が作れる全てが揃っているが、プカロガン内には染色だけを行う工房や蝋書きだけを行う工房があり分業制だ。

プカロガン出身の友人の実家は染色の工房らしく、プカロガン内には小さな工房がたくさんあるらしい。

インドラマユとプカロガンに訪れた時は、５月６日から６月６日までのラマダンというイスラム教における断食月でしたので、バティックに携わる人々は日中、元気が無く帰宅時間も３時ととても早かった。日中は食べることができないので、お昼は寝たりと体力を減らさないように働いていた。ラマダンが開けると、レバランという２週間の大型連休に入る。日本でいうと正月休みのようであり、１ヶ月分のボーナスや甘いシロップやクッキーの缶が会社からプレゼントされる。なので、現地の人々は早々にレバランムードが強くなり実家に帰る人もいるので工房は閉まってしまい制作ができないということもあった。ラマダン中はイレギュラーなことが多く起こったが、改めてインドネシアと日本での制作環境の違いを感じることができた。

今回はバティックを大学外で主に制作をした。地域ごとに色彩やモチーフも異なり、よりインドネシアの地域ごとの特色を知ることが出来た。インドネシアは多民族国家なのでぜひ訪れる際は大学だけに留まらず、いろんな地域に足を運び地域性の違いを見てみることをお勧めしたい。